

博物館を生かすには

第三世代の博物館については、本紙でも過去に紹介されました。收藏品・珍品奇異なものや高価なもの、財宝・宝物等を公開する第一世代の博物館が、過去のものであるのに対し、まるで、博物館風土病にかかったごとく、全国各地に建設された多くの大規模公立館は、特別展を前面に出し教育普及事業を推進している第二世代の博物館です。

これに対し、第三世代の博物館とは、資料収集・調査研究・資料の整理保存等の博物館活動の全てを、博物館職員側が専ら受け持ち、博物館を利用する側の地域住民は、あらゆる面で、その成果を享受する教育普及事業に参加するといった、これまでの博物館活動に対し、博物館機能の全ての面にわたり、地域住民が参画し、館員とともに、資料収集から整理保存・調査研究活動を行う活動体だと考えられます。

だからといって、どの館園も、第三世代に向けて活動しはじめたかという、そうではありません。県内の大部分の館園は、第一世代～第二世代の段階です。本紙で語られた、内藤記念くすり博物館の青木館長のくすり館未来構想が新鮮で、うらやましくさえ感じたのが現状ではないでしょうか。

現在、岐阜県は 115 の博物館園があります。この数は、全国 4 番目だそうです。これだけの館園の中で、どれだけの館園が、来館した学習者と対話し、交流がなされているのでしょうか。

一方的に見せればよい。しかも、その展示内容は、数年間変化しない。そんな館が多いのではないのでしょうか。公立館・園の中にも、施設は作ったが、管理するのが精いっぱい、収蔵庫化しているところもあると聞いています。

最近、人を集めることに重点が置かれ、展示業者主体の博覧会的展示が博物館展示と同一視され、地域に根づいていない、全国共通の動的展示や映像展示が多くなってきています。メンテナンスの面でも経費がかかり、数年で展示が古くなってしまふのが現実です。

生きている博物館とは、人気のある博物館であることも必要かもしれないが、それ以上に、生涯教育の場として、長くつき合える存在でなくてはならない。ましてや、情報・知識を与えるだけではないのです。

博物館は、「モノ」があり、そのモノを通し、人と人の交流があります。博物館職員と来館者が対話できて、はじめてモノの価値が高まるのではないのでしょうか。対話の中で新しい文化が生まれてきます。

第三世代の博物館にとって、今必要なものは、金でもなければ、すばらしい建物でもない。まさに、地域の人を動かすことのできる「人」ではないでしょうか。

会員研修会が発足して3年経過しました。協会会員の資質向上を目ざした研修会であり、協会員の活動体験を話し合い、博物館を論じ合う会でもあります。それぞれの立場は異なりますが、博物館を愛し、博物館を育てていこうとする人が集まりつつあります。期待するところです。
(S.A)

学芸職員に想う

群馬県立歴史博物館 学芸課長 外山和夫

まず、学芸員の仕事は専門職制として確立しているのだろうかという疑問から出発する。確立のためには、学芸員自身の質的な向上のための努力が必要なことは勿論であるが、いま一つ大きな問題として人事の問題があると思う。

一般的な公立の博物館施設において、もっぱら学芸員に委ねられるべき業務としては、調査研究・資料の収集・整理・管理・補修などがあり、また、学芸員と社会教育主事等との協力による業務としては、企画・展示・普及などの仕事があると思う。綿密な調査研究活動を基盤にして、資料の収集・整理・管理・補修等がなされ、そのうえに立って展示および普及の活動がなされるべきで、一朝一夕に展示活動ができるものでないことは今更いうまでもない。それだけに専門職としての学芸員の任務は重要で、息の長い仕事として認識されなければならない。

ところで、博物館における現実、学芸員のまかに、社会教育主事・指導主事・研究員・主事等の職名で、学芸員と同じ仕事をする職員が置かれていることが多い。同じ教育の現場である学校では制度上からもまったく考えられないことで、このことは直ちに、博物館に対する認識の不足と、それに起因する博物館の未発達、制度の不備を示し、同時に博物館とそこに働く職員の社会的地位の低さをあらわしていると考えている。ここで学芸員資格を云々するつもりもないが、問題は学芸員も含めてこれらの職員が、息の長い仕事として博物館の業務に専念できる環境・条件が整えられているのかということである。

このような人事の原因としては、

- ① 特に新設館では学芸員は全体的に年齢が若く、職員構成上、主として中堅層以上に教員出身者を配する。
- ② 人事異動の対象となる職場のない学芸

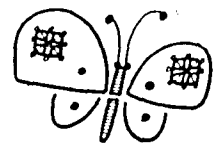
員の採用はなるべく控えたい。

- ③ 学芸員資格を持つ者に適当な人材がない。また、採用の方法も確立されておらず、採用が難しい。
- ④ 学芸員資格のない者でも十分に勤められる職場であるという認識がある。

等々であろうか。かくして、主として教員出身者が配されることが多くなる。

しかしながら、先にも述べたように、学芸員の仕事は息の長い仕事であるので、ここに問題が生ずる。勿論、教員の中にも学芸員資格を持つ者も、自ら望んで赴任する者もあるが、中には「青天の霹靂」という人もあるのではないか。そして普及活動などの一部の業務を除くと、教員経験もあまり役に立たない異質の仕事でもあるので戸惑いも多い。しかも、研究職・行政職の給与表が適用されることが多く、給与・待遇の面でも長く留まることは極めて不利でもある。とすれば「息の長い仕事」とは逆の方向を向きかねない。そうなると、いかに優秀な人材であっても、博物館の職員としては十分に力を発揮できないことになり、まわりの者の足を引っ張り、館の業務を停滞させたり、あらぬ方向に向けたりということになりかねない。もしそのようなことが生ずれば、本人にとっても、博物館にとっても、きわめて不幸なことと言わざるを得ない。

学校との人事の交流をする場合にも、学芸職員として配する場合には、長くとどまって落着いて仕事の出来る人事を望みたい。そして、出来ることなら赴任をしてからでも学芸員の資格は取ってもらいたい。博物館には博物館の人事が必要なのであって、学校人事・教員人事の一環であってはならないと考えている。



第35回 岐博協セミナー報告

「私の作品をめぐって」 李 禹煥氏

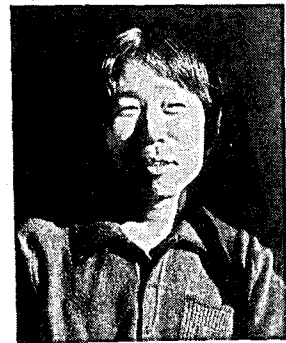
○とき S.63.1.24

○ところ 岐阜県美術館

本年度最後の第35回岐博協セミナーは、岐阜県美術館の『李禹煥展～感性と論理の軌跡～』展覧会鑑賞と、「私の作品をめぐって」という李禹煥氏自身の講演会に参加する企画でした。

現代美術の作家として、また評論家として、そして多摩美術大学の教授という3足のワラジをはいて活躍している氏の話をお聴こうと、250余名の人々が美術館の講堂にあふれました。県内はもとより、遠く関東からも聴衆は詰めかけ、画廊の経営者、美術評論家、美術館職員といった、プロの参加者が多かったのは、今回の企画（国内の公立館では初めての展覧会）に寄せる現代美術界の関心の高さをうかがわせるものでした。

講演のなかで、李禹煥氏は、制作を顧みて、日本で現代美術と取り組むようになったきっかけ。絵画・彫刻・評論と幅広い



活動を続けてきた自分史を語るとともに、絵画と彫刻に対する芸術観の相異。自作を観てもらったときの見方等々、多様な仕事そのままに、多くの事柄について言及されました。

会場に多く展示された〈点〉と〈線〉の芸術の底には、故郷の東樵という老画家の教え「点と線ですべての絵は成り立っている」「点や線に神気をもたせるためには修練を積む必要がある」が横たわり、東洋画の伝統に根ざした芸術に接することができたひと時でした。

宮崎 惇氏 寄贈

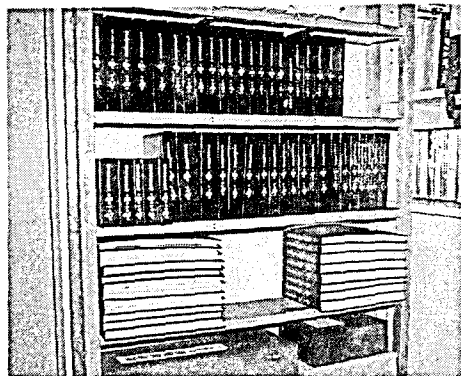
『岐阜県博物館開館資料・全64巻』について

笠松中央公民館長・宮崎 惇氏より『岐阜県博物館開館資料・全64巻』が、2月15日、岐阜県博物館図書資料として寄贈されました。

宮崎 惇氏は、岐阜県博物館協会設立の時から、県下博物館界の指導者的立場で活躍なされ、昭和47年4月、岐阜県博物館準備室が設置されると自然係・動物担当として尽力され、昭和51年の岐阜県博物館開館の年には、自然係長として八面六臂の活躍をなさいました。その間、博物館開館にいたるあらゆる資料を丹念に保存・整理され、昭和62年3月、全64巻に製本されました。その“まえがき”に「岐阜県の県政100年の記念として、県民の要望と期待にこたえて、よりよき人づくりのためにつくられた岐阜県博物館である。（中略）」

年がたてば、創設の精神や苦心は忘れ去ら

れる場合が多いものである。『故事は今を知る所似なり』という温故知新の教えや、将来岐阜県博物館史あるいは岐阜県の博物館史研究のためにも、少しは役立つものと考え、岐阜県博物館開館資料全64冊をここに残す次第です』とあります。利用希望の方は岐阜県博物館図書資料室職員にお申し出下さい。



第8・9回 会員研修会報告

第8回

「資料の展示と管理・保存」

「飛騨民俗村見学」

○とき S.62.11.19(木)～20(金)

○ところ 高山市飛騨民俗村

○宿泊 山久旅館



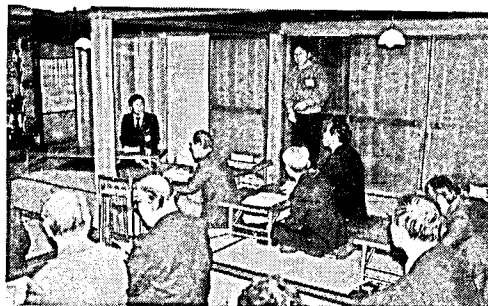
今年度2回目、通算8回目の会員研修会は、飛騨高山の飛騨民俗村をメイン会場に開催されました。

藤井紘一氏、坂本重太郎氏、山腰悟氏、土田吉左衛門氏、大橋宣嘉氏、吉田幸平氏、松本五三氏、小野木三郎氏、和田美喜子氏等々、岐阜県博物館協会の重鎮の方々が多数お集まり下さり、大盛会となりました。

飛騨民俗村の格別のご配慮と、倭一弘氏、小山司氏のご尽力により、民俗村の見学と展示の実践報告は大変参考になりました。

また、山久旅館における夜の研修会は、深夜にまで及び、隣室の泊り客から苦情が出る程の大討論会になってしまいました。

翌20日には、吉田幸平氏による甲冑の管理・保存の特別講義もあり、実りの多い宿泊研修会となりました。



第9回

「資料の梱包実技」

「来年度の会員研修会へむけて」

○とき S.63.2.23(火)

○ところ 岐阜県博物館研修室

○講師 沢田貞雄氏
(日本通運美術品課)

62年度最後の会員研修会は、博物館人としてどうしても知っておくべき、『もの』の取扱いと、梱包についての実技講習を中心に、開催されました。

日本通運美術品課の沢田氏を講師に招き、

1. 資料取扱いの心構え
2. 服装・道具について
3. 梱包材の作り方
4. 土器・焼き物の梱包
5. 仏像の梱包
6. 軸の取扱い

約2時間半にわたって、23名が実技指導を受けました。

常に資料に接し、『もの』の扱い方については、プロでなければならぬ博物館職員なのですが、実際には理論的・合理的に学習する機会が乏しいようです。まして、手取り足取りの実技指導は得難い機会です。そうした意味で、今回の研修会は、参加者にとっても有意義なものとなりました。

昼食をとりながらの懇談の中で、63年度の研修会については、博物館理論と実践の2本立ての計画で実施してはとの意見が出されました。

新年度、更に充実するよう頑張らしましょう。



〈資料の取扱い、梱包実技講習〉

ナイフ博物館

〒501-32 関市平賀町7

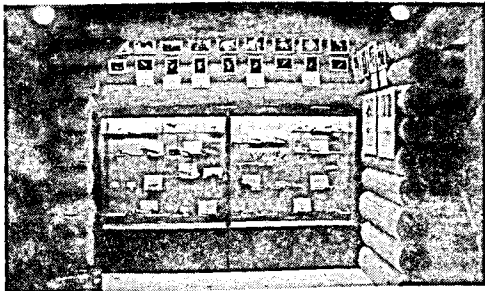
TEL (0575) 24-2132

刃物の街、関市にナイフ専門の博物館が誕生しました。ナイフ博物館といわれて想像するのは、料理で使用するフォーク・ナイフのナイフにちがいない。というのも、私たちの生活の中から、物を作ったり、けずったりするナイフが消えてしまっているからです。ここでは、ヨーロッパを中心に発達した、ハンティングナイフなど、アウトドアライフで使用されるものを中心に展示がなされています。

博物館は、ナイフの冷たさとは別に、直径30～40cmの米松の丸太を使用したログ・ハウスで、落ちついた雰囲気建物です。二階には、数人が語り合える談話室があります。

博物館誕生のいきさつを、館長の高橋清夫氏より伺いました。

今の子どもたちは、ナイフが使用できない。それ以上に、家庭や学校でも、ナイフを自由に持てない。ナイフは危険な道具、人を傷つける道具として見られる傾向にあります。ナイフはマニアの道具としてしか残っていません。ナイフの歴史やナイフの持つ意味を理解していただくと同時に、ナイフの使える子どもたちにしていきたいとの願いと、企業として、ガーバー酒井の使命として、よいナイフ作りを旨とするためにも、世界一流のナイフの収集・展示を試みた



のです。

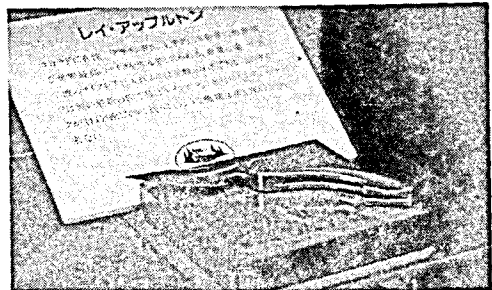
コレクションは、市内だけでなく、アメリカなど世界各地から収集しています。

展示は、歴史的価値のあるナイフからはじまり、美術工芸・アンティークなものまで約350点あります。中国風のナイフ、タイなど東南アジアのナイフなど、独特の飾りがあり興味が引かれます。ソビエトのナイフなどは、ナイフに価格が刻印してあり、お国ぶりがしのべれます。

美術工芸ナイフになると、世界一流のナイフ作家の作品が展示されています。フレッド・カーターの美しく、力強いナイフ、レイ・アップルトンの「レインボー」と名付けられた、ロックが11段階になった機構をもったナイフなどは、見事で、ため息がでるくらいです。また、今は失われた刃物の町、シェフィールドのナイフも見ることができます。

別のコーナーには、ドイツ・ゾーリンゲンのナイフも展示してあり、関のナイフと比較しても興味深い。

工場見学も可能で、実際にナイフを使用して使い方の指導もしていただけるとのこと、学校関係の方々に、ナイフの正しい理解が強く望まれます。



岐阜県の博物館園は全国4番目

日本博物館協会のまとめによると、昭和61年度の博物館総数は2554館にのぼる。年に50館ほど増加しているのが現状である。その中で歴史系博物館は1000館以上になり、自然史系はその8分の1である。

岐阜県の博物館数は115館で全国4番目に多い数である。内容別にみると、

総合-1、郷土-24、美術-13、歴史-55、自然史-13、理工-5、動物園-1、植物園-2、動・水・植-1となっている。他県に比較して自然史系が多いのが特徴である。

ただし、登録博物館は、公立4、私立1で、全国31番目、長野県は130の博物館・園を有するが、登録博物館も33館あり、しかも公立で21館を有している。この違いは、何を意味しているのだろうか。

岐阜県は、博物館の数が多いが、動物園・水

族館は皆無に等しい。

○ 県別博物館園数 (62.3.31) 上位のみ

北海道	187
東京	187
長野	130
岐阜	115
愛知	102
神奈川	89
兵庫	88
静岡	84
新潟	83
京都	63

※ 岐阜県の周辺県では

石川	54
富山	42
福井	42
三重	40

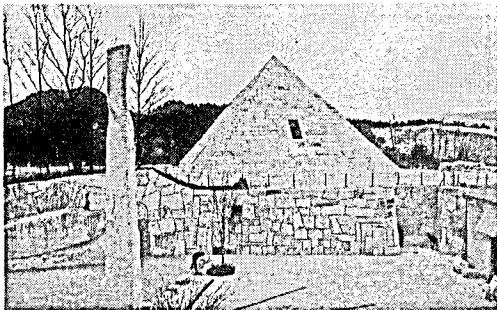
≡ 県内 ニュース ≡

県陶磁資料館開館

多治見市陶元町にあった県陶磁器陳列館が、同市東町に一新され開館。

博石館 ピラミッド完成

恵那郡姪川村田原の博石館では、御影石のピラミッドを建設していたが、3月11日(金)に完成、4月26日(火)に公開する。スケールは、エジプト・ケオプスの10分の1のスケール。



④

昭和63年度 岐阜県博物館協会総会案内

昭和63年度、第1回役員会及び通常総会を次の内容で開催します。多数の参加を望みます。

月日： 5月10日(火) 13:30～

場所： サンピア岐阜 (県美術館西)

岐阜市西荘1229の2

(TEL 0582) 74-8300)

当日、県美術館の見学を予定しています。

編集後記

◎ 今回は博物館のヒトに焦点をあて企画してみました。モノとヒトの問題は、博物館だけの問題ではありませんが、モノを売る仕事でなく、文化・知識を売るのですからヒトの問題は重要となってくると思います。

◎ 機関紙が、こんなに遅れたことはないと思っております。定期的に発行されて機関紙としての役目が果たせるものです。正常化されるよう努力します。(編集者一同)